

## 師弟・芸の流れ

—私の中の六代目—

## 花柳 基

昭和39年生まれの私は、六代目菊五郎という方を、その舞台も、お姿も全く拝見しておりませんが、日本舞踊を志す私にとって、故人となられた歌舞伎役者の方の中で突出して耳にするお名前があります。私個人が強く意識し始めたのは、今から二十年ほど前名披露目で「舟弁慶」を踊ることとなり、花柳寿楽先生にお稽古していただいた頃からであります。親しくさせて頂いていた、故、大川橋蔵さんより、芝居においての六代目のエピソード（針箱＝写実主義）をお聞きしたりはしていましたが、本当の意味での出会いはこのときであったと思っております。寿楽先生は、六代目のなざり方、考え方を細かくご自分の思いも含めてご指導下さいました。流儀の作品ですし、六代目のすばらしさを熱く語る一方、花柳の古典の型は崩されませんでした。その後も「鏡獅子」「保名」「文屋」「喜撰」等のお稽古において、七代目三津五郎丈、猿翁丈、のお話と共に六代目のことをいろいろ教えて下さいました。

よくお聞きするお話としては、六代目の仰っていた「電車の連結部分」のお話があります。車両を四つお書きになり「車両は踊りの振りで、連結部分が間なんだ。ここが大事なんだ。」と教えて下さいました。他にも観客に受けてものらずに逃げるくらいの心構えであること、より多くの拍手を強請らず、またケレン味に走らないこと等、寿楽先生のお話は六代目の表現にとどまらず、精神面にも及ぶものであります。

私が申しますのも僭越でございますが、寿楽先生が舞台をつとめられるとき、六代目なら二代目ならどうなさるか、六代目が二代目をご覧になったらどう思われるか、ご自分の目以外に、六代目、二代目を通してご自分を見つめる目をお持ちのように思われます。師弟間のその様な深いつながりを通じて、意思や、思いのこもった芸が踏襲されていくのではないのでしょうか、まだまだ足元にも及びませんが、私もかくありたいと日々考えております。

ところで、六代目が歌舞伎・日本舞踊会全体に影響を与えたもののひとつに、演出方法があります。「羽根の禿」「藤娘」「保名」「鷺娘」の新演出等、舞踊の近代化に大きな功績を残されました。それまでの古典とは明らかに違う獨創性に富んだ演出は見るもの全てに驚きと感動を与え、次々と新しくも後世に残る舞台となりました。

しかし、現在に至ってはその多くが既存のものと考えられがちで、それ以前の型の消失、軽視もあるかに思われます。中にはご自分に合わせた仕様も多くあり、それまでの演出の改ざんであるという部分も忘れてはなりません。勿論、中には無から新たに生み出されたものもあり、踊り方自体が、六代目から変わったことも事実です。ですから、六代目の遺されたすばらしいものは、すばらしいものとして、受け継いでいきたいと強く思っております。今ある日本舞踊を創った六代目といっても、過言ではないでしょう。しかしその一方、斬新で近代舞踊家の魁であった六代目の没後、50年という時を経て、残された演出法自体も普及し、古典化しているということもあります。これは、ある程度新しい世代の認識不足といえるでしょう。私が教えにしております日本大学芸術学部の学生を見ておりますと、若い世代の多くは、六代目の創られたものもそれ以前のものも、同じ古典と思っているようで、六代目の興された新日本舞踊運動をその功績（羽根の禿・藤娘の演出など）と共に教え、双方の価値とその違いを認識させる責任を痛感いたします。

しかし、新しい認識が生まれてきているのもやはり事実であり、新しい世代の新しい認識が生まれたなら、当然のことながら新しい舞台が求められます。今、そういった変革の時期が訪れているように感じられます。

今を生きる私達は、何をやっても六代目が良く、どんなものもかなわないとばかりは言うてはいられないのです。それは否定しているのではなく、私自身としては、六代目の型だけではなく本質を受け継いでいきたいと思っております。が、六代目を絶対とせず、それ以前の古典の型、それぞれの流儀に伝わる型をもふまえて研究し、そして新たな演出、新たな型を模索していかなければならないのではないのでしょうか。

したがって、私達は、六代目がなされた型だけ全て真似すればいいのではなく、その本質、精神をも受け継ぎ、かつてなされた様に、私達なりの新しい風を興す時期にあり、使命があると思われま

す。「まずくとも本物の芸を・・・」という六代目の言葉を胸に刻み目標に向かって、精進してまいりたいと存じます。人・芸・作品、どの観点から見ましても、六代目の遺されたものは、その影響力といい、そのすばらしさといい、容易に語り尽くせません。これから先私も、新たなもの、私独自のものを生み出すよう、私の限りを行儀よく尽くしていこうと思っておりますが、その中の何かひとつでも後世に残せたら、と自らの目標という意味もこめて願っております。